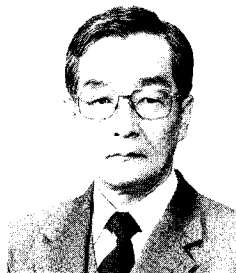


日本熱測定学会会長
神奈川工科大学教授 谷口 雅 男



新年明けましておめでと
うございます。会員の皆様
にはおすこやかに新春をお
迎えのこととお慶び申し上げ
ます。

さて、私は昨年10月から
前会長矢澤彬先生の後を受け
て、2年間の任期で会長
に就任いたしました。会長
の任務を全うできますよう
に、会員の皆様の御鞭達

のほどをお願いいたします。
1965年秋、元会長関隼三先生らの御尽力により第1
回熱測定討論会(大阪)が開かれ、昨年秋には第25回記
念熱測定討論会が大阪大学において開催されました。こ
の四半世紀の間、同討論会を母体として、熱測定研究会、
日本熱測定学会と変遷・発展をとげ、錚錚たる諸先生方
が歴代会長を務められました。このたび、昭和1桁生れ
の小職が会長の席をけがすことになり、時の流れをつく
づく感じる昨今であります。幸い時機をえて、昨年、熱
測定討論会25周年記念特集が発行され(“熱測定” (4)
206~240(1989)), まさに新たな質的發展の段階に入
ったと存じます。ここで、改めて、日本熱測定学会を現
在の隆盛に導かれた先駆的な歴代会長をはじめ諸先生方
に心から厚く御礼申し上げますとともに、本学会のさら
なる発展のために最善をつくすことをお約束いたします。

1950年、東工大の卒業研究の学生として所属した恩
師・久保輝一郎先生の研究室では固体反応、固体触媒の
研究を行っておられ、X線分析、熱分析が研究手段の柱
でありました。X線発生のための高真空実験や示差熱分
析用の検流計の不具合や基線の調整にかなりの時間をさ
いたこともなつかしい思い出です。私の卒研テーマは、
活性の劣化した五酸化バナジウム触媒表面に存在する異
物質の同定でしたが、上記の装置の不具合と低感度のた
めに、なかなか良い結果はえられませんでした。その後、
1962年、カナダのNRC博士研究員として国立資源・
エネルギー研究所において、当時ピカピカのRobert L.
Stone社製の発生ガス分析器を内蔵したEGA-DTA同時
測定装置により、遷移金属アンモニウム塩の複雑な熱
分解過程を追跡できた時の感激は現在でも忘れられませ
ん。これを基に熱分解反応の平衡測定にも成功しました。

以後、固体の関与する無機反応のうち、主として高温固
気系の化学平衡や遷移金属酸化物やカルコゲン化物など
の不定比化合物の安定領域の研究を中心に、熱分析、熱
測定、熱力学へと自然に深入りし現在にいたりました。
これととも、第1回の討論会以来の“熱測定……”など
から受けた世界に類のない熱測定・熱分析の一体とな
った御指導のたまものです。自分がお蔭で成長し、その自
分が学会の発展のお手伝いをするという関係が、まさに
“熱と私”のように感じられます。

15年前に関先生が日本熱測定学会の発足にあたり書か
れた巻頭言に“わが国では、物質構造研究に比べエネル
ギー的側面の研究がおくれたのは何故であろうかと問わ
れ、その原因の一つとして、わが国の産業が外国技術特
許の導入と海外のエネルギー資源にほとんど依存してい
ることに関係があらう”と述べておられますが、その本
質的事情は現在もかなりあるように思われます。昨今は、
いわゆる経済事情をはじめ、生命科学や電子材料科学な
どのめざましい進展により、全体が底あげされて発展し
ているような錯覚をおぼえます。しかし、こと“熱”に
関する限り、これだけ機器測定装置が進歩したにもか
かわらず、“熱”をその研究の中心におくグループも、
“熱”を自己の研究にとり入れるグループも年期を必要
とすることに変わりはなく、飛躍的な展開よりは着実な進
歩発展が期待され、現実にもそのように思われます。私の
留学時代の実感としても、先進性ということとエネルギ
ー的側面をきちんと頭に入れておくことは不可分の関係
にあり、今後、わが国では溢々このことが重要となるで
しょう。海外から来日される多くの研究者、特に留学生
がかつて私共が外国で学んだ先進国の味を日本において
本当に味わって帰国し、母国での熱測定の発展に寄与し
てもらうためにも、わが学会の責務は重要であると存じ
ます。

さて、本年の学会の行事であります。恒例の第19回
熱測定講習会は既に90名以上の応募があり、2月に東
京において、また第8回ワークショップ(高分子関係)
は5月に関東地区でそれぞれ開かれます。第20回熱測定
講習会は7月に京都において開かれ、第9回ワークショ
ップは秋に予定され、テーマを募集中であります。25回
記念事業の一環としての第2回日中熱測定シンポジウム
は5月に近畿大学において開催されます。第26回熱測定
討論会が高見沢先生のお世話により11月に九州大学にお
いて開かれ、有機材料関係のミニシンポジウムも同時に
予定されております。

おわりに、会員の皆様の本年の御健勝と御研究の益々
発展されることを祈念申し上げます。